

会議名	日本畜産学会第106回大会
開催日時	平成18年3月29日－3月31日
開催場所	福岡市（九州大学六本松キャンパス）
主催者	日本畜産学会
参加人数	約1000人
1. 会議の概要	<p>第106回大会のスケジュールは、3月28日は幾つかの研究会、シンポジウム、29日は一般発表及び総会、30日は研究会及びシンポジウム、31日は一般発表、であった。私は29日及び31日の遺伝育種分野の一般発表（第 会場及び第 会場）、及び30日の家畜育種研究会（動物遺伝育種学会、在来家畜研究会と合同開催）に参加した。第 会場では連続13課題が在来家畜に関する発表で、うち11課題がブータンの在来家畜についての発表であったことには違和感を覚えた。この程度のものなら在来家畜研究会で発表すればよい。</p> <p>遺伝育種分野は例年通り、統計的、数量的手法による研究と、DNA解析手法による研究とに大別されるが、前者では材料集めに苦勞の跡が伺われ、また新たな切り口で解析しようとする努力の跡も伺われた。実際の家畜の育種は当面この手法で進められるであろう。DNAを直接解析対象としたものには研究水準の差が大きい。この分野では、抗病性を対象形質とした研究が増加したと感じられた。研究の進展については幾つか注目すべきものがあった。</p> <p>家畜育種研究会は平成17年度退官の二人の教授による講演で、学術的に目新しい内容はなかったが、退官講演としては内容があったと言えるべきであろう。聴衆も200名を越えていたと思われる。</p>

<p>2 . 今後の研究 開発分野として 重要と思われる 発表</p>	<p>ホルスタイン種的能力評価に関連して、新たな切り口で遺伝的パラメータを評価した研究（帯畜大、日ホ北支局、北酪検、家畜改良セなど）は能力をいかに正確に評価するかの観点からのもので今後に期待したい。肉用牛の飼料利用能力を改良しようとする観点からの研究（神戸大など）、体細胞クローンの能力検定への活用の観点からの研究（家畜改良セなど）などは改良に正面から取り組もうとした研究と評価できる。</p> <p>DNA関連では、幾つかの遺伝子のSNP型と泌乳形質との関係进行分析した研究（家畜改良技研）は興味深かった。すでに既知の遺伝子ではあったが、ベルギーのグループが発見した遺伝子は、乳脂率の変動に大きな寄与をしているとの報告は印象的であった。また肉牛では、ヒトにおいて既知の遺伝子が肥育牛の脂肪交雑の変異に関与しているとの報告（京都大など）があり、統計的解析の段階ではあるが、脂肪交雑遺伝子の一つを特定できたと言えるであろう。ただし、この遺伝子のSNP型の集団中の頻度などは不明である。</p> <p>抗病性に関わる領域（MHC）の解析は、今後の重要研究領域と思われるが、これらの成果が実用化されるのはまだ時間がかかるかもしれない。</p>
<p>3 . その他の 発表</p>	<p>家畜育種研究会では、東北大学西田 朗教授の「家畜育種における分析と総合」、京都大学佐々木義之教授の「肉用種ウシの選抜基準—外貌から遺伝子へ—」と題する講演が行われた。演題から容易に想像できるように、西田教授の講演はやや哲学的であり、佐々木教授の講演はレビュー的であった。私のように実用的情報を求める現実派にはいささか高邁すぎる内容であった。</p>
<p>4 . 今後研究 開発課題採択 に当たって参 考とすべき事 項等</p>	
<p>5 . 報告者</p>	<p>松川 正</p>